

思想の社会的意義と言葉の外皮

……ナロードニキ主義は、ロシアの農民民主主義派のイデオロギー（見解の体系）である。だから、すべての自覚した労働者は、このイデオロギーがどのように変化しているかを注意ぶかくあとづけなければならない。

—

ナロードニキ主義は、非常に古いものである。ゲルツェンとチェルヌィシェフスキーとが、その創始者と見られている。1870年代の革命家たちの「人民」（農民）「のなかへ」という運動が、真のナロードニキ主義の最盛期であった。前世紀の80年代に、ヴェ・ヴェ（ヴォロンツォフ）とニコライ・オンが、ナロードニキ主義の経済理論を、もっとも完全なものに仕上げた。二十世紀のはじめに、エス・エル〔社会革命党〕がナロードニキ左派の見解をもっともはっきりした形で表現した。

1905年の革命は、諸階級の公然たる大衆行動のなかで、ロシアの**すべての**社会的諸勢力をはっきりしめすことによって、ナロードニキ主義を総点検し、その地位を確定した。農民の民主主義——これが、ナロードニキ主義のただ一つの現実的内容であり、その社会的意義である。

ロシアの自由主義的ブルジョアジーは、彼らの経済的地位からして、プリシケヴィチー派の特権の**廃止**ではなくて、農奴主と資本家とのあいだの特権の**分割**をめざすことをよぎなくされている。逆に、ロシアのブルジョア民主主義派——農民——は、これらすべての特権の**廃止**をめざすことをよぎなくされている。

ナロードニキの「社会主義」とか、「土地の社会化」とか、均等性などという文句は、農民が政治における完全な平等を、また農奴主的土地所有の完全な廃止をめざしているという現実の事実をおおいかくす、たんなる空語である。

1905年の革命は、ナロードニキ主義のこうした社会的本質、こうした階級的本性を徹底的に明るみにだした。大衆の運動は、——1905年の農民同盟の形態であれ、1905年と1906年の各地の農民闘争の形態であれ、最初の両国会の選挙の形態（「勤労」グループの創設）であれ——幾百万の農民が**行動**している姿をわれわれにしめしたこれらすべての偉大な社会的事実、ナロードニキ主義のえせ社会主義的な文句をちりあくたのように掃きすて、核心、すなわち、巨大な、まだ汲みつくされていない力の貯えをもった農民的（ブルジョア）民主主義を明るみにだした。

新しい、現代ロシアにおける偉大な時代の**経験**によって、ナロードニキ主義の現実的内容とその言葉の外皮とを区別することを学ばなかったような者は、まったく見込みのない人間であり、こういう者の言うことを真にうけてはならない。こういうような者は美辞麗句をもてあそぶ作家（『ルースコエ・ボガートストヴォ』のア・ヴェ・ペのような）となることはできても、政治家となることはできない。

第18巻 P560~561 『ナロードニキ主義について』
『プラウダ』第16、17号、1913年1月20、22日

ポイント

私たちは、各政治グループの階級的利害を見ぬき、その現実的内容とその言葉の外皮とを区別することを学ばなければならない。